

福翁白傳 (七)

福澤 謙吉 口述
矢野由次郎 志記

長崎遊學 (三)

それから下ノ關の渡場を渡て船場屋を搜し出で、兼て用意の賃手紙を持て行な所が成程錢屋とは懸意な家と見える手紙を一見して早速泊めて呉れて萬事能く世話ををして呉れて大阪まで船賃が一分二朱、賃の代は一日若干ソコ船貨を拂ふた外に二百文か三百文しか残らぬ併し大阪に行けば中津の倉屋敷まで取り拂ふ事にして是れも船宿で能く承知して呉立來た、スルト其縄を引張て呉れ其方の處を如何して呉れと船頭が何か騒ぎ立て乗組の私に顧みから、ヨシ奈など云ふので繩を引張たり柱を起したり面白半分に様々加勢をして先づ滯りなく下ノ關の宿に着て「今日の船は如何したのか斯う云ふ浪風で斯う云ふ目に遇た潮を冠つて着物が濡れたと云ふと宿の内儀さんが「それは危ない事ぢや彼が船に慣れる事をするから少し浪風があると毎度頭なら宜いが實は百姓です此節暇なものです夫れから船場屋久右衛門の處から乗た船には三月の事で皆上方見物、夫れは一種をなす奴が乗て居る間抜けな若旦那も乗て居れば頭の秀た老爺も乗て居る上方邊の素屋女も居れば下ノ關の安女郎も居る坊主も百姓も有らん限りの動物か拂ふて其奴等が狭い船の中で酒を飲み博奕をする下らぬ事に大きな聲をして聞かれぬ話をして面白さうにして中私一人は眞實無言、丸で取付端がない、船は安藤の宮殿へ着た私は宮殿に用はない座來たから唯鷦を見て上る、外の連中はお互に朋友だから宜いだらう博奕を飲む私も飲みたくて堪らぬけれど金が無いから只官呂を見たばかりで船に歸つて来てむしやく船の飯を喰てるから船頭もみんな客は忠やだらう妙な顔をして船を出て駆けの金比羅まで三里と云ふ行きたくないとはなりが金がないから行かれぬ船か船から官人出て行く私一人で船の番をして居る爾うすると一瞬船をせいつもひつもデンくに歸つて駆けの金比羅まで三里と云ふ行きたくないが金がないから行かれぬ船か船から官人出て行く私一人で船の番をして居る爾うと如何やら斯うやら十五日目に播州明石

それから下ノ關の渡場を渡て船場屋を搜し出で兼て用意の賃手紙を持て行な所が成程錢屋とは懸意な家と見える手紙を一見して早速泊めて呉れて萬事能く世話ををして呉れて大阪まで船賃が一分二朱、賃の代は一日若干ソコ船貨を拂ふた外に二百文か三百文しか残らぬ併し大阪に行けば中津の倉屋敷まで取り拂ふ事にして是れも船宿で能く承知して呉立來た、スルト其縄を引張て呉れ其方の處を如何して呉れと船頭が何か騒ぎ立て乗組の私に顧みから、ヨシ奈など云ふので繩を引張たり柱を起したり面白半分に様々加勢をして先づ滯りなく下ノ關の宿に着て「今日の船は如何したのか斯う云ふ浪風で斯う云ふ目に遇た潮を冠つて着物が濡れたと云ふと宿の内儀さんが「それは危ない事ぢや彼が船に慣れる事をするから少し浪風があると毎度頭なら宜いが實は百姓です此節暇なものです夫れから船場屋久右衛門の處から乗た船には三月の事で皆上方見物、夫れは一種をなす奴が乗て居る間抜けな若旦那も乗て居れば頭の秀た老爺も乗て居る上方邊の素屋女も居れば下ノ關の安女郎も居る坊主も百姓も有らん限りの動物か拂ふて其奴等が狭い船の中で酒を飲み博奕をする下らぬ事に大きな聲をして聞かれぬ話をして面白さうにして中私一人は眞實無言、丸で取付端がない、船は安藤の宮殿へ着た私は宮殿に用はない座來たから唯鷦を見て上る、外の連中はお互に朋友だから宜いだらう博奕を飲む私も飲みたくて堪らぬけれど金が無いから行かれぬ船か船から官人出て行く私一人で船の番をして居る爾うと如何やら斯うやら十五日目に播州明石

それから下ノ關の渡場を渡て船場屋を搜し出で兼て用意の賃手紙を持て行な所が成程錢屋とは懸意な家と見える手紙を一見して早速泊めて呉れて萬事能く世話ををして呉れて大阪まで船賃が一分二朱、賃の代は一日若干ソコ船貨を拂ふた外に二百文か三百文しか残らぬ併し大阪に行けば中津の倉屋敷まで取り拂ふ事にして是れも船宿で能く承知して呉立來た、スルト其縄を引張て呉れ其方の處を如何して呉れと船頭が何か騒ぎ立て乗組の私に顧みから、ヨシ奈など云ふので繩を引張たり柱を起したり面白半分に様々加勢をして先づ滯りなく下ノ關の宿に着て「今日の船は如何したのか斯う云ふ浪風で斯う云ふ目に遇た潮を冠つて着物が濡れたと云ふと宿の内儀さんが「それは危ない事ぢや彼が船に慣れる事をするから少し浪風があると毎度頭なら宜いが實は百姓です此節暇なものです夫れから船場屋久右衛門の處から乗た船には三月の事で皆上方見物、夫れは一種をなす奴が乗て居る間抜けな若旦那も乗て居れば頭の秀た老爺も乗て居る上方邊の素屋女も居れば下ノ關の安女郎も居る坊主も百姓も有らん限りの動物か拂ふて其奴等が狭い船の中で酒を飲み博奕をする下らぬ事に大きな聲をして聞かれぬ話をして面白さうにして中私一人は眞實無言、丸で取付端がない、船は安藤の宮殿へ着た私は宮殿に用はない座來たから唯鷦を見て上る、外の連中はお互に朋友だから宜いだらう博奕を飲む私も飲みたくて堪らぬけれど金が無いから行かれぬ船か船から官人出て行く私一人で船の番をして居る爾うと如何やら斯うやら十五日目に播州明石

それから下ノ關の渡場を渡て船場屋を搜し出で兼て用意の賃手紙を持て行な所が成程錢屋とは懸意な家と見える手紙を一見して早速泊めて呉れて萬事能く世話ををして呉れて大阪まで船賃が一分二朱、賃の代は一日若干ソコ船貨を拂ふた外に二百文か三百文しか残らぬ併し大阪に行けば中津の倉屋敷まで取り拂ふ事にして是れも船宿で能く承知して呉立來た、スルト其縄を引張て呉れ其方の處を如何して呉れと船頭が何か騒ぎ立て乗組の私に顧みから、ヨシ奈など云ふので繩を引張たり柱を起したり面白半分に様々加勢をして先づ滯りなく下ノ關の宿に着て「今日の船は如何したのか斯う云ふ浪風で斯う云ふ目に遇た潮を冠つて着物が濡れたと云ふと宿の内儀さんが「それは危ない事ぢや彼が船に慣れる事をするから少し浪風があると毎度頭なら宜いが實は百姓です此節暇なものです夫れから船場屋久右衛門の處から乗た船には三月の事で皆上方見物、夫れは一種をなす奴が乗て居る間抜けな若旦那も乗て居れば頭の秀た老爺も乗て居る上方邊の素屋女も居れば下ノ關の安女郎も居る坊主も百姓も有らん限りの動物か拂ふて其奴等が狭い船の中で酒を飲み博奕をする下らぬ事に大きな聲をして聞かれぬ話をして面白さうにして中私一人は眞實無言、丸で取付端がない、船は安藤の宮殿へ着た私は宮殿に用はない座來たから唯鷦を見て上る、外の連中はお互に朋友だから宜いだらう博奕を飲む私も飲みたくて堪らぬけれど金が無いから行かれぬ船か船から官人出て行く私一人で船の番をして居る爾うと如何やら斯うやら十五日目に播州明石

それから下ノ關の渡場を渡て船場屋を搜し出で兼て用意の賃手紙を持て行な所が成程錢屋とは懸意な家と見える手紙を一見して早速泊めて呉れて萬事能く世話ををして呉れて大阪まで船賃が一分二朱、賃の代は一日若干ソコ船貨を拂ふた外に二百文か三百文しか残らぬ併し大阪に行けば中津の倉屋敷まで取り拂ふ事にして是れも船宿で能く承知して呉立來た、スルト其縄を引張て呉れ其方の處を如何して呉れと船頭が何か騒ぎ立て乗組の私に顧みから、ヨシ奈など云ふので繩を引張たり柱を起したり面白半分に様々加勢をして先づ滯りなく下ノ關の宿に着て「今日の船は如何したのか斯う云ふ浪風で斯う云ふ目に遇た潮を冠つて着物が濡れたと云ふと宿の内儀さんが「それは危ない事ぢや彼が船に慣れる事をするから少し浪風があると毎度頭なら宜いが實は百姓です此節暇なものです夫れから船場屋久右衛門の處から乗た船には三月の事で皆上方見物、夫れは一種をなす奴が乗て居る間抜けな若旦那も乗て居れば頭の秀た老爺も乗て居る上方邊の素屋女も居れば下ノ關の安女郎も居る坊主も百姓も有らん限りの動物か拂ふて其奴等が狭い船の中で酒を飲み博奕をする下らぬ事に大きな聲をして聞かれぬ話をして面白さうにして中私一人は眞實無言、丸で取付端がない、船は安藤の宮殿へ着た私は宮殿に用はない座來たから唯鷦を見て上る、外の連中はお互に朋友だから宜いだらう博奕を飲む私も飲みたくて堪らぬけれど金が無いから行かれぬ船か船から官人出て行く私一人で船の番をして居る爾うと如何やら斯うやら十五日目に播州明石

それから下ノ關の渡場を渡て船場屋を搜し出で兼て用意の賃手紙を持て行な所が成程錢屋とは懸意な家と見える手紙を一見して早速泊めて呉れて萬事能く世話ををして呉れて大阪まで船賃が一分二朱、賃の代は一日若干ソコ船貨を拂ふた外に二百文か三百文しか残らぬ併し大阪に行けば中津の倉屋敷まで取り拂ふ事にして是れも船宿で能く承知して呉立來た、スルト其縄を引張て呉れ其方の處を如何して呉れと船頭が何か騒ぎ立て乗組の私に顧みから、ヨシ奈など云ふので繩を引張たり柱を起したり面白半分に様々加勢をして先づ滯りなく下ノ關の宿に着て「今日の船は如何したのか斯う云ふ浪風で斯う云ふ目に遇た潮を冠つて着物が濡れたと云ふと宿の内儀さんが「それは危ない事ぢや彼が船に慣れる事をするから少し浪風があると毎度頭なら宜いが實は百姓です此節暇なものです夫れから船場屋久右衛門の處から乗た船には三月の事で皆上方見物、夫れは一種をなす奴が乗て居る間抜けな若旦那も乗て居れば頭の秀た老爺も乗て居る上方邊の素屋女も居れば下ノ關の安女郎も居る坊主も百姓も有らん限りの動物か拂ふて其奴等が狭い船の中で酒を飲み博奕をする下らぬ事に大きな聲をして聞かれぬ話をして面白さうにして中私一人は眞實無言、丸で取付端がない、船は安藤の宮殿へ着た私は宮殿に用はない座來たから唯鷦を見て上る、外の連中はお互に朋友だから宜いだらう博奕を飲む私も飲みたくて堪らぬけれど金が無いから行かれぬ船か船から官人出て行く私一人で船の番をして居る爾うと如何やら斯うやら十五日目に播州明石

大改革を斷行 す可し

社説

に着た朝五ツ時今八時頃、明日晴れになれば船が出ると云ふ、けれどもコンナ連中のたれ供そしては限がない是れから大阪までは何里と聞けば十五里と云ふ「ヨシ、それちや乃公は是れから大阪まで歩いて行く就ては是迄船頭が中々聞かない」「爾う首くは行かぬ一切に來い此荷物だけは預けて行くからと云ふ物を拂ふ事にして是れも船宿で能く承知して呉立來た、スルト其縄を引張て呉れ其方の處を如何して呉れと船頭が何か騒ぎ立て乗組の私に顧みから、ヨシ奈など云ふので繩を引張たり柱を起したり面白半分に様々加勢をして先づ滯りなく下ノ關の宿に着て「今日の船は如何したのか斯う云ふ浪風で斯う云ふ目に遇た潮を冠つて着物が濡れたと云ふと宿の内儀さんが「それは危ない事ぢや彼が船に慣れる事をするから少し浪風があると毎度頭なら宜いが實は百姓です此節暇なものです夫れから船場屋久右衛門の處から乗た船には三月の事で皆上方見物、夫れは一種をなす奴が乗て居る間抜けな若旦那も乗て居れば頭の秀た老爺も乗て居る上方邊の素屋女も居れば下ノ關の安女郎も居る坊主も百姓も有らん限りの動物か拂ふて其奴等が狭い船の中で酒を飲み博奕をする下らぬ事に大きな聲をして聞かれぬ話をして面白さうにして中私一人は眞實無言、丸で取付端がない、船は安藤の宮殿へ着た私は宮殿に用はない座來たから唯鷦を見て上る、外の連中はお互に朋友だから宜いだらう博奕を飲む私も飲みたくて堪らぬけれど金が無いから行かれぬ船か船から官人出て行く私一人で船の番をして居る爾うと如何やら斯うやら十五日目に播州明石